

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「恥ずかしくない恩師に」

北海道
布目 欣生

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「恥ずかしくない恩師に」

布目 欣生(ふめ・きんせい)

「先生は、恩師です」

その言葉に、私は全身の力が抜けた。私は涙を流しながら、これほど悲しい恩師という言葉を知らなかった。

私はその頃、かなり参っていた。教職に就いて十年ほど。尽きることのない仕事に連日追われ、前向きだった気持ちにも陰りが出ていた。

そんなある日、携帯電話が鳴った。見知らぬ番号だった。警戒しながら出るとそれはどこか懐かしい声だった。

「先生ですか」

「ええと、〇〇くんのお父さんですか」

「そうです。先生はお元気ですか」

それは二年前に卒業した教え子のお父さんだった。懐かしさに私は気分が上り、駅のホームのベンチに腰かけ、乗るはずの電車をやり過ぎることにした。

「はい、まあ元気にやっています」

「それはよかったです。その節はお世話になりました」

そう答えながらも、妙な違和感があった。先方は何か激しい感情を抑えているようだった。疑問に思いながら、教え子の近況を尋ねた。

「〇〇くんはどうですか。中学の方、元気に行っていますか」

その違和感は、最悪の形で的中してしまった。

「あの……実は先日、〇〇が亡くなりました」

「え……」

絶句してしまった。

卒業後、野球部にも入り、体つきもがっしりしたのを他の人から聞いていた。

「あの……それは……どうして……」

それは口からついたものか、自分の頭の中を回っていただけの言葉なのか分からなかった。だがそんな私に、お父さんは、抑えた口調で「うおっしやった。」

「心臓発作でして。ほんと。こんなことがあるなんて。まさかあいつがこんな形で」

その言葉が途切れる前に、私は涙していた。駅のホームで周囲の目もあつたけれど、止めようがなかった。

お父さんの言葉は続く。

「前の晩に遅くまで起きて、ゲームをしていたんです。そのまま、目を覚まさなくて。ゲームなんかさせないで、寝かせていればよかつたかも。私のせいです」

「そんな」と……」

お父さんのせいであるはずがない。ただ彼の最期は、寝たまま起き上がれなかつたのか。どれほど苦しかつたことだろう。

涙が止まらないまま、それでも事実を受け入れることを全面拒否している自分がいた。

電車が何本か来て、その都度、人が吸い込まれていく。どれほどの時間、そうしていたのだろうか。

「先生、先生」

電話口からのお父さんからの呼びかけで、私は我に返った。

「やっぱり先生は、思ったとおりの先生でした。実はこの電話、あの子のものです。この携帯の電話帳に、『恩師』って出てきたもんで。もしかしてと思つてかけたら、やはり先生でした」
その事実は、私を打ちのめした。

「先生が、あの子のことを心から悲しんで泣いてくれて、嬉しかったです。先生はやっぱり、あいつにとつての恩師です。たった十四年の短すぎる人生だったけれど、そんな先生に出会えたのは、せめてもの救い……」

お父さんの言葉はそこで途切れ、号泣が聞えた。抑えていた感情が溢れた。私も嗚咽した。途中で駅員さんが声をかけに来るほどだった。

帰り道で、彼の訃報と、恩師という言葉が、ただただ頭の中を巡っていた。

私は帰るとすぐ当時の卒業アルバムを開いた。アルバムには一枚のスナップ写真が挟まっていた。卒業式の後、看板の前で彼と肩を組んで写真を撮ったものだ。

あの時、彼はこう言った。

「先生の、携帯番号教えて」

「はい、これ。それじゃあ、中学に行つても頑張るんだよ」

「先生、ありがとう。先生のおかげで小学校、すごく楽しかった」

それが彼と交わした最後の言葉だった。

その後、入学祝に手にした携帯電話に、私のことを登録したのだろう。

後悔しかなかった。卒業したあともっと沢山連絡をとればよかったと。成人式や同窓会に呼ばれるのを、何となく楽しみにしているだけでよかったのだろうか。

気持ちのやり場もなく、カーテンを乱暴に開き、窓を開けた。星も見えない夜だった。

「先生は、そんな立派じゃないよ。今だつて、うまくいかないことだらけなんだから……。それなのに、何で先生より先に……」

闇の中に気持ちを溶かすように、ひたすら眩いていた。近所から見たらさぞ怖かったであろう。いつの間にか、窓にもたれてウトウトしていた。

翌朝、ひんやりした冷気に、私は力なく顔をあげた。目の前に一筋の光が映った。

「ああ」

闇の中の光は、どうしてこんなに明るく眩しいのだろうか。彼の死が嘘であつてほしいと何万回願つても、それが打ち消される。その繰り返しに、疲れ切っていた。

目の前の光が、彼との当時の素敵な思い出を蘇らせてくれた。

小学生だったときの彼。

彼は、とても人なつつく、やんちゃなところがあった。曲がったことやずるいことは嫌いで、人とぶつかることもあった。女の子に告白するかどうか悩んで相談しに来たときも、いじらしかった。

そんな彼と過ごした教室。笑い声。言葉。

景色に色のついた空に向かい、一度、彼の名を呼んだ。

「いめんよ。先生、頑張るから。もう少し待っていてくれよ」

恩師と慕つてくれた彼のためにも、こんなところまでくじけているわけにいかない。

私は空の向こうの彼に、誓った。またあの頃のような自分に戻つて、泥臭くやっついていくことを。

私は立ち上がり、大きく背伸びをし、彼のいる方向に一礼をした。

あの日からまた十年ほど経った。

私は今でも彼のことを毎朝思い出してから、「おはよう」と元気に声を出す。まだまだ恩師などとは程遠い。理想の教師像を目指す道は、果てしなく遠い。

彼の訃報に涙した当時のクラスメイトたちも、今はもう成人し、立派な社会人になっている。なかには、私と同じ道を選んだ子もいる。

「彼の分も、頑張るよ。先生みたいな先生になるんだ」

そんな恥ずかしいことを言ってくれる子もいる。

さあ、今日も一日の始まりだ。

「〇〇、おはよう」

彼はきつと見ていてくれる。私たちは進んでいく。今日も空は晴れている。